

花山天文臺の日食觀測陣容について

臺 長 山 本 一 清

本年6月19日の皆既日食は下の如き二つの觀點から重要視すべきものであると、自分は可なり以前から考へてゐた。

(1) 歐亞大陸を横斷する皆既線の長さに於いて、近年、殆んど無比のものであり、又、其の皆既線上に當る土地は、殆んど何所へでも鐵道や自動車で極めて容易に行くことが出來、尙ほ、長く滞在し、生活するに不便を感じない。従つて、今回の日食觀測適地は無限にある。(此の點に於いて、一昨1934年2月14日の日食や、明1937年6月8日の日食の如き、何れも一孤島を除いては、皆既全線が海洋上にある場合と比べて、著しい對照をなすものである)。

(2) 皆既線の一部が我が國の北海道の地域内を通過するために、我が同胞が此の珍しい天象を楽しみ、又研究するのに絶好の機會を與へるものである。

上の二つの立場から考へて、今回の皆既日食の觀察を出来るだけ有効に遂行したいと自分は思つた。そして、(1)のためには、かねてから考へてゐた所に従ひ、一種の Weltpolitik とも言ふべき世界大の觀測計畫と方針を立てやうと決心した。又、(2)のためには、此の際、我が天文臺に關係する全員を總動員し、教官から一學生に至るまで、日食觀察を體驗させるべきであり、其のためには、天文臺に保有してゐる諸種の觀測器械をも總動員すべきであると考へた。つまり、一は觀測機會の特異性を確認し、他は此の日食の教育的効果をねらうとしたのである。

ところが、時恰も社會は、あらゆる意味の“非常時”に際會し、大學が文部省に要求した日食豫算は、其の全部が採用されることが殆んど不可能らしく感ぜられたので、昨1935年中頃、經費の點に可なりの心細さを覺えつゝ、取り敢へず、教育的効果を狙つて、専ら北海道に九つの觀測隊を送らんとし、急報第173號に之れを發表した。

其の後、自分は滿支方面に出張の序でを以つて、北滿地方の地理と社會事

情とを調査研究し、大に覺る所があつた。

同時に又、自分は昨年の春以來、ロシア國のプルコフ中央天文臺長 B. P. Gerasimovic 博士と交渉を開始し、出來得るならば、シベリヤの各地に少くとも三つの觀測隊を派遣したい希望を以つて、ロシア國內の地理と社會事情に關する情報を獲んと力めた。之れに對して、ゲラシモキチ博士は始めから非常なる好意を示され、電報や書面をよこして歡迎の意を示し、尚種々具體的な厚意を示されたので、今年頭の頃は、自分も可なり乗り氣になつて、内外の準備を進めた。

ところが、去る2月以來、國內には帝都の變があり、滿露國境も甚だ微妙なる政局の動きが見え、剩へ、上記ゲラシモキチ博士からの書面中にも、「外國の觀測隊の獨立募營が許されず」、又「オムスク以東に外國隊の滯留が禁ぜられる」由が傳はつたので、止むなく一時大陸進出の計畫を中止し、むしろ北海道方面に主力を集中することに決心し、只、願ふらくは北滿のみに一隊を出張せしむることを考へ、之を急報206に發表した。——こゝまでの事は本誌181號第242—244頁に略述した通りである。

しかるに、5月に入るに及んで、内外の情勢は三轉した!! 但し、其の内容は決して一律ではない。先づ、文部省方面よりの内報により、政府の日食査定豫算は激減し、始め要求した豫算に比べて、殆んど桁違ひの少額しか給せられないことが暗示され、吾等は大なる失望と驚愕とを感じ、一時は全く途方に暮れた有様であつたが、止むなく、勇を鼓して、觀測計畫を再吟味し、尚ほ一面に於いて學術研究に深き理解ある人士の援助を得るため奔走したのであるが、之れが圖らずも一部成功して、愁眉を開いた。

他方に於いて、新興滿洲國の學術文化昂上のために働かうとする吾人の微意が通じてか、圖らずも滿鐵關係から甚だ同情ある鼓舞的な援助が與へられることとなつたがために、北滿行の計畫は首尾よく遂行の軌道上に乗ることとなつた。

次に又、シベリヤ方面に觀測隊派遣の案については、外務省が國際的文化交歡の大局から之れに賛意を表せられ、非常に熱意ある奔走をせられたるため、匿名某氏の寄附金が得られることとなつた。之れがため、三隊派遣の

理想案にまでは移し得なかつたとは言へ、オムスク市へ一隊を派することに決意し得たのは、實に幸福であつた。

結局、わが花山天文臺よりの日食觀測隊の組織は、天界 181 號所載のものを更に改めて、下の如き形に落ち付いた。

花山天文臺皆既日食觀測隊 總指揮 山本教授

第一觀測隊 北海道枝幸村 監督 竹田助教授

第一班 コロナ及び閃光スペクトル撮影 柴田、荒木(九)兩理學士擔當。30糎シロスタト使用。

第二班 部分食及びコロナ直接寫眞撮影 荒木(健)氏及び宮本理學士擔當。15糎シロスタト使用。

第三班 コロナの眼視觀測及び活動映寫。山本夫人主任。
(之は飛行機による計畫である)

第二觀測隊 北海道中頓別村 小生理學士主任 木邊氏補助
コロナ光度觀測。40糎シロスタト使用。

第三觀測隊 北海道遠輕町 高城氏主任(大口氏補助)

第一班 コロナ變動寫眞觀測 第一號機使用。

第二班 コロナ延長寫眞撮影 ハイデ赤道儀使用。

第四觀測隊 滿洲國呼瑪 監督荒木助教授 公文高倉兩理學士擔當
コロナ變動寫眞觀測 第二號機使用。

第五觀測隊 ソ國シベリヤ オムスク市 山本博士、稻葉堀井兩理學士擔當
コロナ變動寫眞觀測 第三號機使用。

尙、この滿洲呼瑪へは上海自然科研究の囑託により、地磁氣觀測の目的を以つて京都帝國大學天文學教室の栗原講師、上谷理學士の一行が出張する筈である。

かようにして、吾人の年來の希望が幸ひに達せられ、此の好機に、國外國內を通じての一大觀測陣を張ることを得るに至つたのは、吾人の光榮とし、且つ又、誇りとする所である。(1936. 5. 15 記)